

「死への準備教育」の動向

—教育現場で実践できるカリキュラムを求めて—

中 村 一 基*

(2002年3月20日受理)

Kazumoto NAKAMURA

The trend of death education

[キーワード] 死への準備教育・命の授業・生と死の教育

はじめに

「人は必ず死ぬということを、しっかり子供に教えるべきです。『楽しく、快適に生きましょう』という教育の仕方では、子供は精神性に目覚めない。」(池田晶子)という言葉が、ある新聞(記憶が不鮮明)の片隅に載っていたのを、ある種の予感をもって書きとどめていた。その予感とは、「死への準備教育」の始まりの予感だった。日本における「死への準備教育」の提唱の始まりがいつだったのか、明確に決めることは難しい。が、そのエポックメイキングになった出来事は想定できる。それは、1986年はアルフォンス・デーケン氏が編集した叢書『死への準備教育』が発刊された年である。また、1987年は「」代表の深澤久氏が「命の授業」を研究授業として始めて行った年である。「死への準備教育」の必要性がデーケン氏によって提唱しつづけられ、深澤氏の「命の授業」が教育現場で追実践されてから、ほぼ15年の歳月が流れている。80年代後半から90年代にかけて、「死への準備教育」の必要性が教育現場だけでなく、医療現場の終末医療の問題とも関連して浸透していった。さらに、1995年に阪神大震災、1997年に小学生連続殺傷事件に見舞われた兵庫特に神戸で、両教育委員会を中心に「心の教育緊急会議」が開催され、さらに、両教育委員会後援で1998年6月「兵庫・生と死を考える会」(会長高木慶子)が「心の教育(生と死の教育)研修会」を開催する。1999年には、「生と死の教育研究会」を発足、「教育現場で実践できるカリキュラム」を作成するなど、「死への準備教育」の実践に向けた積極的な試みを行っている(兵庫・生と死を考える会編『心の教育/生と死の教育/教育現場で実践できるカリキュラム』による)。また、鹿児島では種村エイ子氏(鹿児島短期大学講師)の活動が注目される。なお、本報告は教育学部と附属学校との共同研究会「心と道徳」分科会の、平成14年度の研究テーマ「死への準備教育」のために、焦点を「教育現場で実践できるカ

* 岩手大学教育学部

リキュラム」に合わせて、調べた事例報告であることを断っておく。

「死への準備教育」を行う理由

「死への準備教育」提唱者デーケン氏は、次のようにその必要性を述べている。

この世に生を享けた者にとって、死はだれにでもいつか必ず訪れる、普遍的・絶対的な現実である。死を前もって個人的に体験することはできないが、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探究し、自覚をもって自己と他者の死に備える心構えを習得することは、いま、あらゆる面でもっとも必要とされる教育といえよう。(『生と死の教育』シリーズ教育の挑戦、岩波書店、20001年、2頁)

そして、「死への準備教育」とは「自分に与えられた死までの時間をどう生きるかと考えるための教育」(同、3～4頁)と定義づけた。すなわち、「生の究極の到達点である死の日まで、自分に与えられた時間をいかに生きようか」(同、4頁)と考えることで、「死への準備教育」は「よりよく生きるための『生への準備教育』(ライフ・エデュケーション)」(同)であるという。高木慶子氏(英知大学教授。兵庫・生と死を考える会会長)は「生と死の教育」研究会作成「教育現場で実践できるカリキュラム」(「兵庫・生と死を考える会」, 中・高校向け)の「カリキュラム作成に当たり」(前書き)で、現代社会を「『生きている』ことの実感が希薄になった社会」「『死』を看取る体験の少ない社会」と捉えた上で、「死への準備教育」の必要性・目的を次のように記している。

「死」を学ぶことで、子どもたちのすべての事件を必ずしも予防できるとは考えられない。しかし死を直視することにより「いのちの尊さ」を自覚させる機会とはなるだろう。死を考えることは決して人々に不安や恐怖を与えるためではない。むしろ「生きていることの大切さと生かされていることの尊さ」を体験させるためである。(「教育現場で実践できるカリキュラム」3頁)

また、熊田亘氏(埼玉県立志木高校教諭)は「命の授業」の目標を「死について学ぶことを通じて、生の価値を再認識する」(「死と並んで歩いて行けたらなあー高校生が『死の授業』から学んだものー」『死生学がわかる』朝日新聞社、2000年、84頁)と記している。<死を学ぶことは、生を学ぶこと>という認識は、「死への準備教育」に携わる教師たちにとってほぼ共通認識と言っていいのではないだろうか。高橋 誠氏(慶応義塾高校教諭)は「死への準備教育」の「第4回：『死への準備教育』の目的」において、始めに「今、なぜ死を学ぶのかー『死に上手』になるために」として、

- ① Death education is life education.
- ② How to die is how to live.
- ③ 「死に上手」は「生き上手」(「死に下手」は「生き下手」)
- ④ 「死に上手」は「死なせ上手」(「死に下手」は「死なせ下手」)
- ⑤ 「死に甲斐探し」は「生き甲斐探し」
- ⑥ 「死に支度」は「生き支度」(「生きざま」が「死にざま」を創る)

のような六項目を上げたことが如実にそのことを示していよう。

「死への準備教育」の難しさ

平山正実氏（東洋英和女学院大学教授・精神科医・「死生学」担当）は「死への準備教育」の難しさを、次のように指摘する。

死についての教育は、一般の教育とはかなり違った面をもっている。それは、死というものは、教える立場にある教師自身も死ぬ存在であるということ、つまり、単に知識や情報を伝達する「教育」ではないからである。（略）死についての教育は、教師の死生観が問われるものであり、教えるというよりも、死を中心にみんなで謙虚に学び合おうとする気持ちが大切であろう。（「大学おける『死への準備教育』」，2000年10月21日「死への準備教育」研究会での講演趣旨，「死への準備教育」研究会ホームページより）

すなわち、「死への準備教育」の難しさとは、まず教師の死生観が問われるということなのだ。得丸定子氏（上越教育大学助教授）も「児童、生徒に『死』を教えるためには、まず、教員が死について考え、学ぶ必要がある。ということは、教員になる学生が死を学ぶ必要がある。」（カール・ベッカー編『生と死のケアを考える』第1章 学校で「死」を教える。法蔵館，2000年，32頁）とした上で、学校教育における「死への準備教育」を行う上での多くの課題について、

カリキュラムの設定，教材の開発，限られた授業時間における授業内容の厳選，「死」に対する根強いタブーとの対応，児童・生徒がホスピスボランティアを経験するためのホスピス施設の少なさ，「死」を具体的に印象深く教えるための外部講師の招聘が時には必要であるが，その招聘のための手続きと費用の捻出のむづかしさ，そして，もっとも大きな課題は「死」を教える教師側の意欲と配慮と研修の問題があげられる。（同書，43頁～44頁）

と指摘している。特に「教師側の意欲と配慮と研修の問題」と述べているように、「死への準備教育」（「生と死を考える教育」）は教師の死生観が問われるなど，多くの課題を抱える。その中でも，全国の中でも『「死」を教える教師側の意欲と配慮と研修の問題』に，積極的に正面から取り組んでいるのが，兵庫県の県立教育研修所の〔心の教育総合センター〕であろう。そこでは，全国に先駆けて，1999年3月に教職員用研修プログラムをまとめ，教師向けの研修を開いた。

教育現場で実践できるカリキュラム

「死への準備教育」がどのように理解されているかを知るには、「死への準備教育」として授業している教師たちがどのようなカリキュラムを組んでいるかを見れば，大筋見えてくるだろう。年間10回前後の授業をどのように組み立てているか，事例として，先程から名前の上がっている「兵庫・生と死を考える会」「生と死の教育」研究会・埼玉県立志木高校の熊田亘教諭・慶応義塾高校の高橋誠教諭の3例をあげてみる。

実例(1)「生と死の教育」研究会作成「教育現場で実践できるカリキュラム」(「兵庫・生と死を考える会」中・高校向け)

第1回：命のつながり 第2回：死に別れた人の悲しみ 第3回：生と死について学ぶことの必要性 第4回：避けられない死・避けられるかもしれない死 第5回：生と死をとりまく現代医療 第7回：喪失体験と悲嘆 第8回：生と死を学んできて(まとめ) 第9回：生かされているいのちのすばらしさと感謝。

実例(2) 志木高校における「死の教育」の年間プラン(埼玉県志木高校・熊田亘教諭・倫理)

第1回：身近な人や生きもの(ペットなど)の死 第2回：死ぬまであとわずか。あなたならどうする? 第3回：自殺について 第4回：病名告知をめぐる 第5回：死の恐怖
第5回補：『100万回生きたねこ』を読む 第6回：自分の葬儀をデザインする
第7回：延命治療と尊厳死 第8回：日本人の死生観 第9回：キリスト教・イスラム教・ゾロアスター教・現代科学の死生観 第10回：臓器移植について

実例(3) 慶応義塾高校における「死への準備教育」授業内容(慶応義塾高校・高橋 誠教諭・一般<家庭科>)

第1回：オリエンテーション―「生活一般」の年間授業と担当者 第2回：禁煙教育(I)
第3回：禁煙教育(II) 第4回：「死への準備教育」の目的 第5回：がんになったとき―知りたい・知りたくない, 知らせる・知らせない 第6回：あと一週間しか生きられないとしたら 第7回：どこで死を迎えたいか―病院死・在宅死・ホスピス死 第8回：ホスピスとは 第9回：モルヒネは「神様からの贈り物」―がんの痛みからの開放 第10回：愛する者を喪う時, 自分はどうなるのか―アルフォンス・デーケン「悲嘆のプロセス」における12段階 第11回：自分の死が現実のものとなった時, 自分はどうなるのか―エリザベス・キューブラー＝ロス「死へのプロセス」における5段階 第12回：笑いとユーモア―闇(病み)にさす光 第13回：生と死を超えて―絵本『100万回生きたねこ』(佐野洋子作)

この3例に影響を与えているのが、アルフォンス・デーケン氏の「死の哲学」の講義内容である。

実例(4)上智大学「死の哲学」のカリキュラム(上智大学・アルフォンス・デーケン)

第1回：哲学的に見た死の意義―「死への準備教育」の必要性など。

第2回：死へのプロセスの六段階とその理解。

第3回：悲嘆教育～1 悲嘆教育の必要性。悲嘆のプロセスの十二段階の説明。配偶者を喪う時に備える教育など。

第4回：悲嘆教育～2 複雑な悲嘆―突然死, 交通事故, 過労死, 自殺などのあとで。

第5回：悲嘆教育～3 死別体験者の話を聴く。

第6回：死への恐怖と不安について 死への恐怖と不安の九つの形。これを乗り越えるには, など。

第7回：死とユーモア ターミナル・ケアにも必要なユーモアの役割。

第8回：自殺～1 ①自殺の定義。②自殺の統計。③自殺の動機。

第9回：自殺～2 ④自殺の倫理的評価。⑤自殺の防止。

第10回：臨死体験～R・A・ムーディ・Jr, 中山善之訳『かいまみた死後の世界』などから。

第11回：死にまさる生命～1 死後の生命をめぐる問題―ソフラテス, プラトン, 来世信仰, カント,

ゲーテ、マルセルなど。

第12回：死にまさる生命～2 永遠の生命への考察。『新約聖書』における永遠の生命の描写など。

第13回：死の歴史－死生観の変遷。－後半に演習「別れの手紙」

第14回：末期患者とのコミュニケーション－がん告知，インフォームド・コンセントなど

第15回：ホスピス運動－ホスピスの歴史。理念。ホスピス運動の歩みなど。

第16回：末期患者への援助－音楽療法・読書療法・芸術療法などの効用。

第17回：死と愛－歴史や文学史上から。

第18回：文学における死～1 ギリシア，ドイツ，ロシアなど。

第19回：文学における死～2 アメリカ，日本など。

第20回：音楽の中の死－「レクイエム」，「死と乙女」，「亡き子を偲ぶ歌」など。

第21回：芸術における死－絵画，彫刻，美術など。－後半に演習「もし，あと半年の命しかなかったら」

第22回：避けられない死と避けられるかもしれない死 交通事故・戦争・民族紛争・核兵器・環境汚染・地雷など。

第23回：死の定義～脳死と臓器移植について

第24回：葬儀の意義

第25回：死を前にした人間的成長

同じく大学での講義の実例を，もう1例だけあげておく。

実例(5)東京外国語大学の総合科目「生と死から学ぶ－デス・スタディーズ入門」(現国土館大学助教授・鈴木康明教諭)

第1講～第4講：〔人間の生について〕

第5講～第8講：〔人間の死について〕

第5講 BE THERE ①痛みについて②新たなかかわり③ホスピス

第6講 LOSS AND GAIN ①悲嘆について②私たちがのかかわり③変容の実際

第7講 GIFT ①子どもたちへのDeath Study ②検討課題としてのGIFT

第8講 WILL AND WISH ①寿命への期待②死に方への意志③脳死と臓器移植

補講 ①自殺について②虐待について

学校教育における「死への準備教育」

(1) 学校教育(小・中学校)におけるデス・エデュケーション

現在の小・中学校における「死への準備教育」の取り組みの現状について「子どもの年齢や理解度に合わせ，配偶者や子どもなどの肉親を失った人の話を聞いたり，死についての著作や絵，新聞記事などを読んだり，または学校で動物を飼って世話をするなど，教えるというよりは子どもたちに考えるきっかけを与えるといった内容が多い。」(多氣田亜希子「学校教育(小・中学校)におけるデス・エデュケーション」『死生学概論』)と分析されている。小・中学生対象のもので，注目される動向は，[④]の深澤久氏・鹿児島島の種村エイ子氏らの「いのちの授業」であろう。「小学校教育に『総合学習』が導入されたことで『いのちの教育』に対する注目も高まり，兵庫県のように教育委員会レベルでの取り組みを始めている例もある。」(同)とあるように，「総合学習」の導入が「死への準備教育」へ

の取り組みを容易にしていった視点もあるし、事実、その可能性は高い。種村エイ子氏の場合、学校を訪問しての「いのちの授業」であるが、多氣田亜希子の分析にあてはまる。一例をあげるならば、弟を亡くした六年生の少女の手紙を紹介したあと、死について扱った絵本を読み聞かせる。自分の体験や思いも語る。結論めいたことはほとんど言わない。「考えてみて」「読んでみて」で止める。「死を見つめると、生が輝いて見えた。そして、子どもたちに生きることについて考えるきっかけを提供したいと思いました。」(談)(朝日新聞、2000年3月6日の記事「広がる『いのちの授業』」より)。種村エイ子氏の「いのちの授業」は担任の許可を得て、道徳・国語の時間に行ったりしたようだが、もちろん、社会や家庭や理科といった現行の授業の中に、デス・エデュケーションの内容を練り込むことも可能であろう。ただ、「昨年(1998)、福岡教育大学附属福岡小学校でデス・エデュケーションを展開した植松伸之さん(現・福岡県糸島地区教育研究所主事)は、新学校指導要領の目玉、『総合的な学習の時間』に着目する。植松さんは『年齢に応じて、体験型学習で命の尊さと死の姿を学ぶカリキュラムを組んでは』と呼びかける。」(西日本新聞社文化部ホームページ)といった意見に見えるように、最も自在に授業を組み立てることが出来そうな時間は「総合的な学習の時間」ではないだろうか。ただし、前述したように、既存の授業科目の中で「生と死を考える教育」も可能である。そのことを実践したのが、深澤 久氏(群馬県高崎市立佐野小学校教諭)の道徳授業「命の授業」(1987)である。深澤自身「数万の教師が追実践し数十万の子ども達が経験した、おそらく道徳授業始まって以来最大・最強の道徳授業の一つである。」(『道徳授業を楽しく／「生」と「死」に正対した道徳授業への挑戦—「生」と「死」を見つめて—』明治図書、1998、No14)と巻頭論文「道徳の根本問題、それは『生と死』である」(第3回道徳教育シンポジウム発表要旨「命の大切さをどう教えるか」参照)において述べているように、実際、深澤氏の「命の授業」の追試そして、その修正追試という形で多くの試みがなされてきている。深澤氏はまず「生命」に関わる基本的なことを確認するとして、次の五点をあげる。「①自分の生命は他の生物の『死』の上に成立している。②自分の生命は数十億年の生物の進化の歴史を遺伝子の中に受け継いでいる。③『死』は必ず訪れる。④(必ず訪れる)自分の『死』は一回しか体験できない。⑤様々な『死に方』がある(が、死んでしまえば『全て終わり』)。」(同論文)。そして、この授業の究極的な目的を「『たくましく生きていけ』というメッセージを子ども達に伝えること」(同)だとする。また、そのアプローチ方法として「①生命誕生から命の大切さを(⇒例、「誕生のシステム」の授業)②死から命の大切さを(⇒例、「命の授業」)③死から生きるたくましさを(⇒(例、「いじめで自殺と赤ちゃんの死」))の三つをあげ、これから試みていくべきは「死から生きるたくましさを」の授業実践であることを示唆する。深澤氏の「命の授業」は「命の値段」など、斬新な切り口を提示しているが、第3回道徳教育シンポジウム発表要旨「命の大切さをどう教えるか」で「『命の大切さ』道徳授業づくりの心構え」のポイントとして「①授業者が『必要だ』と強く思う内容を取り上げる。②既成の教材に縛られず、自分で教材を開発する。③<死を知れば生を意識する>④『人権』と結ぶ。」を強調している。

(2) 学校教育(高校)におけるデス・エデュケーション

高校における「死への準備教育」の内容については、大きく三つに分かれるだろう。「死の定義、死の解釈、死後の生などについて、科学・宗教・哲学・文学・芸術など様々な立場から、過去の偉人たちがこの問題にいかに取り組んだかを手掛かりにして『死の意義』を考える。」(櫻内正美「学校教育(高校)におけるデス・エデュケーション」『死生学概論』)がその1、「安楽死、脳死と臓器移植、葬儀、ホピスなど『死をめぐる諸問題』について、身体的、心理的、精神的、経済的、社会的な立場から検討する。」(同)がその2、「がん告知、自殺、死別と悲嘆(グリーフ)など『死とどう向き

合うか』について、キューブラー・ロス博士らの『死生学』の成果をふまえ、死に直面した人間の心理的過程への理解とサポートのあり方などを学ぶ。」(同)がその3。すなわち、「死の意義」・「死をめぐる諸問題」・「死とどう向き合うか」の大きく三つである。

ま と め

「死への準備教育」が現在どのように行われているか、主として、カリキュラム化をめぐって、アウトラインを描いてみた。death education, それを「死への準備教育」と訳したのはデーケン氏であるが、その他「死の学習」「命の授業」「命の教育」と様々に言われている。病死・自殺・災害による死・事故による死・他殺など、子どもは多くの死に直面している。死に直面した子どもの精神的ケアは、もちろん必要だが、日常的に、小学校においては、「どうして人は死ぬの?」「死んだらどうなるの?」「死って怖いの?」といった疑問に答えていく教育が必要なのではないか。本来的には、家庭が体験的にそのような疑問に答える機能を持っていたはずなのだが、それも期待できない現状においては、学校教育がその機能を担う必要がある。それは、どの場面でもいい。総合的学習のテーマとして取り上げることも可能だし、「死というものの持つ悲しさなり怖ろしさなり生命の終焉の重さなりを感じ取らせる道徳授業」「現実の死の持つ意味を子どもたちに考えさせる道徳授業」「『命の大切さ』を教えること以上に、『死に対する認識』をもたせる授業」(深澤 久)というふうに「生と死を考える(見つめる)教育」といった視点を持つ道徳教育からの取上げも勿論、可能である。小・中・高校での「死への準備教育」と連動しながら、さらに大学においては、教養教育の中で、また、生涯学習教育の中で、死生学を講義することの必要性も、高齢化社会への移行とともに認識されつつある。

〔参考文献〕

- ①アルフォンス・デーケン著『生と死の教育』(岩波書店, 2001年4月)。
- ②高橋 誠・原 歩/共著『キュアからケアの時代へ 「死への準備教育」を教える慶應高校教師と教え子医師との往復メール』(大道学館出版部, 2000年11月)。
- ③兵庫・生と死を考える会/「生と死の教育」研究会著『心の教育/生と死の教育/教育現場で実践できるカリキュラム』(兵庫・生と死を考える会, 2000年3月[第二版]
<1999年9月[第1版]>)。
- ④河野友信・平山正実編『臨床死生学事典』(日本評論社, 2000年3月)。
- ⑤『AERA MOOK 死生学がわかる。』(朝日新聞社, 2000年6月)。
- ⑥『道徳授業を楽しく/「生」と「死」に正対した道徳授業への挑戦—「生」と「死」を見つめて—』No14。(明治図書, 1998年12月)。